

氏名 岡本 伸介  
学位の種類 博士(音楽)  
学位記番号 甲第33号  
学位授与年月日 令和6年3月25日  
論文題目 マグヌス・リンドベルイ作曲《クラリネット協奏曲》における新たな  
継続的發展性

学位論文等審査委員

<リサイタル審査>

主査	准教授	中村 典子
副査	准教授	酒井 健治
副査	教授	太田 峰夫
副査	教授	岡田 加津子

<論文審査>

主査	准教授	中村 典子
副査	教授	太田 峰夫
副査	准教授	酒井 健治

# 論文要旨

本研究は、マグヌス・リンドベルイ Magnus Lindberg (b. 1958) の《クラリネット協奏曲 Clarinet Concerto》(2001–2002) とジャン・シベリウス Jean Sibelius (1865–1957) の後期のオーケストラ作品の構成法を照らし合わせ、リンドベルイの構成法における継続的発展性の新たな解釈を提起することを目的としている。

マグヌス・リンドベルイはフィンランド出身のポスト・スペクトル世代の作曲家である。彼は、同郷を代表する作曲家ジャン・シベリウスの後期のオーケストラ作品における継続的発展性から影響を受けているため、「シベリウスの後継者」と評されている。リンドベルイの構成法における継続的発展性は、彼の初期の作品である《トゥワイン Twine》(1988) など用いられている発展的なシャコンヌ形式として反映されているとこれまで考えられてきた。つまり、フィンランド民謡に由来するシベリウスの継続的発展性は、リンドベルイの作品へ正確に反映されていたわけではなく、あくまで表層的な影響に過ぎなかった。しかし、彼の《クラリネット協奏曲》の構造は、シベリウスが《交響曲第5番》(1915) 以降で用いたとジェームズ・ヘポコスキが主張する「旋回形式」に基づいていることが明らかになった。旋回形式とは、冒頭に配置された発端となる動機を、そのまま、または変容させながら繰り返す旋回的構造の連なりに基づく形式のことであり、繰り返され続けた動機は「テロス」と呼ばれる目標音型へ変容する。その結果として、楽曲は従来の形式論に捉われない、有機的な構造性を獲得することに繋がる。さらに、リンドベルイの《クラリネット協奏曲》のテロスは、シベリウスの《交響曲第7番》(1924) の特定の部分の構造と関連性を持つことも見出された。従って、本研究はシベリウスの旋回形式に基づいた作品とリンドベルイの《クラリネット協奏曲》の関係性を明らかにし、これまでの研究で見過ごされていたリンドベルイの一部の作品における楽曲構成法の特徴について、新たな解釈を提起するものである。

第1章では本研究で焦点を当てる旋回形式の概要について述べている。旋回形式はシベリウスがラリン・パラスケによる「カレワラ」の吟唱を聴いた経験に端を発しており、その経験を反映させた反復的構成法から発展した構成法である。本章では旋回形式の成立背景と、《交響曲第5番》と《交響曲第7番》におけるその用法を説明する。

第2章ではリンドベルイの《クラリネット協奏曲》の分析を行っている。旋回形式に基づいてこの作品を分析するために、最初にテロスとその起源を明確にする必要があり、この作品のテロスをシベリウスの《交響曲第7番》の特定の部分の構造から判断している。次に、この作品を構成する三つのマテリアルについて述べる。これらの内容は、本研究で特に重要である楽曲の構造分割と旋回形式の発展的用法、テロス生成の過程を明らかにすることへ繋がる。旋回形式はリンドベルイのそのほかの作品でも使用されている可能性が高く、このことについて、第2章の最後に《フェリア FERIA》(1997–1999) の構造から考察している。

本論文の最後に、2023年12月までに発表、または発表の予定が判明しているリンドベルイの作品一覧を掲載している。

《クラリネット協奏曲》の分析によって、リンドベルイの継続的発展性における新たな探究が見出される結果となった。現代のフィンランド音楽と彼の思考の変遷を追っていくためにも、彼の楽曲構成に関する取り組みを今後も注視していく必要がある。本研究が、彼の作品の解釈における新たな視界を切り開くとともに、現代の作曲表現の可能性を広げることを期待している。

# 審査結果の要旨

## <リサイタル審査>

### 日時・場所

2023年11月24日(金)京都市立芸術大学中合奏室  
18:00-19:10

### 審査方法

2023年11月24日(金)18時00分より19時10分にかけて休憩なし70分プログラムによる受験者による博士課程学位申請リサイタルが学舎移転の本学新校舎中合奏室で行われた。リサイタル終了後、審査員4名が意見を交換し、合議による合否判定を行なった。

### プログラム

1. 彼岸に浮かぶ幻影 Visions Appearing on Farther Shores for piano solo
2. ウェイヴィング・エア Waving Air for viola and cello
3. ストローフィズ 第1番 Strophes I for cello solo
4. 銚島三景 3 Seascapes from Hokoshima for 2 violins and piano
5. 3つのアラベスク 3 Arabesques for piano solo

今博士学位申請リサイタルでは、本学卒業・修了の宋和映氏のピアノ、佐藤響氏ならびに名田卓麻氏のチェロ、在校の福澤佑樹、長山佳加、田中志和、山田円香、穴井千尋による指揮・ピアノ・ヴァイオリン・ヴィオラの全5作9曲によるプログラムが、前後のピアノ独奏で中央の器楽群プログラムを包む構成をとって初演された。

2020年来作曲者は故郷岡山の面する瀬戸内海の島々をのぞむ農村地域に創作の拠点を構え、自然環境と伝承文化を念頭に、「地域と共に」地点に根差した創作活動から作品を結実させ、堅固なインストルメンテーション構築へと内的宇宙を結んできた。

第1回第2回リサイタルと今第3回の楽器編成を以下に記す。

【第1回】全曲器楽作品構成かつ英文題による。

同種高音弦=ヴァイオリン二重奏全音域=ピアノ独奏

無伴奏中音管=サクソフォン独奏

低音管弦=ファゴット・チェロ二重奏管打弦全音域=室内管弦楽

【第2回】声楽六重奏で器楽群を包む構成。器楽が英文題、声楽が邦文題\* ( ) 内英文付。

無伴奏高中低混声テクスチュア=六重唱

弦楽テクスチュア=弦楽四重奏

中音管・高中音弦=クラリネット三重奏

無伴奏高音弦=ヴァイオリン独奏無伴奏高中低混声テクスチュア=六重唱

【第3回】ピアノ独奏で全器楽群を包む構成。邦文題と英文片仮名表記が正題となる。

全音域＝ピアノ独奏

中低弦＝ヴィオラ・チェロ二重奏

無伴奏低弦＝チェロ独奏

同種高音弦と全音域＝ピアノ三重奏

全音域＝ピアノ独奏

今回は、プログラム冒頭と終曲のピアノ独奏が内奥の中低音弦二重奏、低音弦独奏、同種高音弦の二重奏とのピアノ三重奏を結び、【全より個】【個より全】双方への往還が地域性を通して構築される。前回での六重唱の邦題テキスト＝宮澤賢治詩による近代との対話は、今回ピアノという【近代の法器】とオーケストラコロス弦楽との且つそれらの交差による幾層もの地点時点が、その地のリズム性でひそやかに又たしかにささえられ、旋律性メロスの【湧出】へとはこばれる。

第1曲ピアノ独奏曲《彼岸に浮かぶ幻影 Visions Appearing on Farther Shores》では、作曲者の在する地点からのぞむ島々の中の今なお神のまつられる神秘性が、残響と差音の音響的うねりの聴覚現象をまとう宋和映の優れた ピアニズムを依代に、一面白色の伽藍ホワイトキューブを新たに響かせた。

第2曲ヴィオラとチェロによる《ウェイヴィング・エア Waving Air》では、岡山南部民謡《下津井節》と玉野市指定無形文化財の地踊り《かつからか》に基づく岡本の多様な変型と融合が、穴井千尋、名田卓麻、福澤佑樹による密やかな息を伴う神秘的な波打ち、激しくざらつくアンビヴァレントで大気を軋ませ震わせつつ、人と天地のあいだの地点の記憶を呼び起こし刻みつける。

続く第3曲の中核のチェロ独奏《ストローフィズ第1番》では、超難度の精緻なうねりの螺旋状の流動と間髪入れぬ細かな震え、浮揚と飛翔、ホログラム状に立ち頭れるイリュージョナルなハーモニクスまで、佐藤響の自在のムーヴメントが新たに、響の多層の深奥からの湧出へも誘う。

ここで全3回の作品名について以下へ記す。

### 【第1回】

Inverted Colors (2vn.) [2019, 世界初演]

Transition (pf. solo) [2017, 改訂初演] Strophes II 《Spirale》 [2019, 西京初演]

Choral and Delirium (fg. vc.) [2016, 2018, 京都初演]

Nocturne or Intimate Notes (fl. perc. 2vn. va. vc. cb. cond.) [2019, 世界初演]

### 【第2回】 \*宮澤賢治の詩原題尊重からの英文表記。

Spring and Asura (mental sketch modified\*) (6 singers) [邦題：春と修羅 [2022, 世界初演]

Calligraphy for Air and Ground (string quartet) [邦題：大気と大地のカリグラフィー] [2020, 世界初演]

Barcarolle from Inland Sea (cl. vln. vla) [邦題：内海の舟歌] [2020, 西日本初演]

Sonata for Violin Solo 《Regional Air》 [邦題：無伴奏ソナタ《リージョナル・エア》] [2022, 世界初演]

Winter and Galaxy Station (6 singers) [邦題：冬と銀河ステーション 「春と修羅」より] [2022,

世界初演]

【第3回】

彼岸に浮かぶ幻影 Visions Appearing on Farther Shores (pf. solo) [2020, 京都初演]

ウェイヴィング・エア Waving Air (va. vc. cond.) [2021, 世界初演]

ストローフィズ第1番 Strophes (vc. solo) [2018/2020 改訂初演]

銚島三景 3 Seascapes from Hokoshima (2vn. pf.) [2021, 2023 世界初演]

3つのアラベスク (pf. solo) [2023, 世界初演]

全英文題の上記初回プログラムの反転の造形は前回六重唱テキストを通した近代との対話を経て、今プログラム後半2曲各3章計6章の有機的構造性に基づく地域性へと岡本は着地させ、聴くものの日常からの飛翔、日常を飛翔させる響きへと歩んでいる。

第4曲《銚島三景》では、あらゆる人達を参加可能とするアンサンブル・ヌーボーと作曲者の邂逅を契機に地踊り〈かっからか〉のリズム性が有機的に発露され、それらを知る地点の人たちをも引き入れた現在過去未来からの地点的湧出が層を成してそこに顕現する。

岡本の妻の2017年逝去の美術家首藤弘美氏が理想としたであろう、共にある地域の人たちとうみをのぞむ天地を包むいのりの《相聞歌》が、彼方の存在への《哀歌》を、そして母なる150年のときをいただいた小学校《銚島の子どもたち》の、いつしかあらゆる地の地域的有機性をも深化させ得るであろう光の三景がつらねられ、田中志和、山田円香、長山佳加の一音一音のテンペラメントが緩やかに秘めやかにそして光を湛えて鼓動した。

結びの第5曲《3つのアラベスク》では、先人の地点との対話を通して作曲者はふたたび大地へ響きの種を播く。3つの章は、かの地岡山のつる性の植物・果実《ピオーネ Vitis spp. Pione》《アオツツラフジ Cocculus orbicelatus》《エビヅル Vitis ficifolia》と名付けられ、それらの性質、特性を通した響きの造形へと彫琢される。宋和映の波音や鳥の声を感じさせる印象的な神秘的光の差す《ピオーネ》の結びには、デオダ・ド・セブラック Déodat de Séverac の《大地の歌 Chant de Terre》の II. 《種播き Les Semailles》の特徴的な廻る音型が伴われ、強い線で駆け巡り駆け抜ける《アオツツラフジ》の9連のドライブを経て《エビヅル》の深々とした色彩の山野に子守唄に似た祈りの響きが満ち満ちて、瞬く星の如く地より天へと昇ってゆく。

今回の博士課程学位申請リサイタルでは、自身の故郷の大地、風、波といった自然現象をうなりの音響的現象に結んだ堅固な時空間構築と、地域社会の様々な人達との連携により内的世界の有機的連関-地点と結ぶ作家性を確かに発露させ、作品を通して地点の伝統を豊かに演奏家諸氏と響かせて共に創造の奥にむかう往還へと達した。これらにより合議の上、今回の博士課程学位申請リサイタルを審査員全員一致の合格とした。

## < 論文審査 >

### 審査の方法

令和6(2024)年1月25日(木)16時30分よりの公開発表会の席に審査員も出席し、受審者が博士学位論文について約60分間にわたり、論文の目的と概要、ここまでの研究成果と、本論での展開について、スライド・音源を用いて詳細に発表した。その後、15分間にわたって公開発表会の出席者、審査員からの質疑応答、口述試問に対して受審者が答えた。そして受審者退席の上で審査員3名による意見交換、および合否判定を行なった。

### 審査の内容

受審者は、本論文でマグヌス・リンドベルイ(1958-)作曲《クラリネット協奏曲》(2001-02)の構成法における継続的発展性についての新たな解釈を提起した。それは同曲が、リンドベルイがそれまでに探究してきた表現と、女性口承詩人ラリン・パラスケの反復的構成法からジャン・シベリウスへ引き継がれた表現の融合した、師ジェラルド・グリゼー、師ヴィンコ・グロボカールの相反するアドヴァイスによる対立する音楽的性質の和解としての発展的旋回形式に基づく新たな構造によるものであることである。

これらは一段一段、順を追って確実に解明された。従来、リンドベルイの構成法はシャコンヌ形式に継続的発展の概念を反映させているとみなされてきたところ、指摘されてきたシベリウスからの影響がシャコンヌ形式だけに反映されているのかについて、シベリウスの交響曲第5番以降で使用される旋回的構造の連続による旋回形式(ジェームズ・ヘポコスキ定義)への関連を詳細に示した。リンドベルイ自身の言及を元に、交響曲第7番の特殊な演奏効果を持つ特徴的な目標音型グラントロス(テロス:哲学用語:完成・目的)迄の流れを、テロスの起源と先行の空虚5度による3つのテロス群と最終目標音型グラントロスの和音の5つを響かせることで、改変を伴う引用的旋回により同曲を構造させる詳細の核を視覚的かつ聴覚的に示した。

そして、スペクトル音楽とみなされるリンドベルイの師グリゼーの《プロローグ》の構造から、異なる次元に存在する複数のマテリアルを共通の目標に収束させる「総体的かつ継続的操作」「組織的な相互作用」(ユーク・デュフル言及)などの構造上の特徴を確認し、ポストスペクトル音楽としてのリンドベルイ《クラリネット協奏曲》において考慮すべき前提を確かめた上で、同曲のマテリアルの3つの原型を示した。先行のケイティ・モレルとティム・ハウエルの構造分割比較を経て、これら3つのマテリアルの発展、変型例から、ハウエルと岡本による《クラリネット協奏曲》の構造分割を、共に明解な図解によって対比させた。主に5つとするハウエルの構造分割では、対立する音楽的性質の和解に焦点を当てて管弦楽・一管管弦楽・吹奏楽・弦楽・独奏含む室内楽による5層のオーケストレーション変化に特徴が見出せ、主に全体を4つとする岡本の構造分割では3層のマテリアルによる旋回的構造がはっきりと見出せた。

本論文の予備審査の際に指摘された諸点から改善された点は、以下の通りである。

(1)論文で一段一段解明と共に進んでゆく形となっていくよう、また進み過ぎている部分など複数の箇所についてアドバイスがなされて、現在は引用の原文から筆者の考えによる部分を明確に記されている。

また、時代・領域範囲の音楽用語を適切に用いて論述を進めている。

(2)スペクトル音楽についてよく知る審査員の実際からの複数の確認事項により、前提作品への言及、主要研究からの記述をあらたに追加することが必要となった点についても、全てが注釈にまとめられることにより、本論でのスムーズな進行が得られている。

(3)比較のポイントとなる構造比較において視点からの視覚的図解がすべて作表されることにより差異がはっきりと掌握され、またそれぞれの章での明確な図解によって、聴き手読み手の理解を格段に進めることができている。これらによって、論文の全体はよく整理されたと云える。

そしてマテリアルの回想的発展では、過去出現した原型と極端にかけ離れたマテリアルが回想的に用いられ、さらなる改変で異質な音楽性同士の共存で聴き手の心理に影響を与えつつ最終目標グランドテロス生成に集約される特徴的な楽曲展開からの3つのテロスの出現そして起源の曲冒頭のテロスまでの、垂直軸（和声）と水平軸（旋律）を併せもつ生成の道筋が、オーケストレーションとマテリアルの二つの方向より明らかにされた。

さらに、《クラリネット協奏曲》の旋回形式との間に関連性を見いだせなかったテンポ構造についてもテンポ系統間の自然な往来可能となる相互関連性が示されて、全体構造の図解がなされた。また、そのほかのリンドベルイ作品における旋回形式についても《フェリア FERIA》(1997-1999)から可能性が見出され、6つのマテリアルの旋回による構造図が示された。

まとめとして、リンドベルイの《クラリネット協奏曲》の構造の特徴が、発展的な旋回形式に基づくものであることが確認された。そして、リンドベルイの継続的発展性の新たな解釈にはシャコンヌ形式だけでなく旋回形式も考慮すること、シベリウスとリンドベルイを関連させた研究を一層進めてゆく必要があることが述べられた。

続く質疑応答、口述試問においては、シベリウス《交響曲第7番》とリンドベルイ《クラリネット協奏曲》のテンポ性、関係テンポの移行であるリタルダンドとアツチェレランドを入れた作表がなされれば更に音楽の変化の様子が追えることや、シベリウスの第5、第7のふたつの交響曲のメトリックモデュレーションによるリズム性の言及がなされれば、と重要な時間性についての複数の指摘が審査員より寄せられた。これについては、今後一層まとまったリズム性からのシベリウスとリンドベルイ研究が待たれるところである。

これらを踏まえて、予備審査の指摘箇所群の確かな補完により、本論が有機的な確たる存在にあ

ると確認され、また今後の研究のポイントも明らかとなったことより、今回の博士学位論文本審査を審査員全員一致の合格とした。